滕池神社を訪ねて苦の坂を歩く

苦の坂の橋姫神社と馬ころ橋

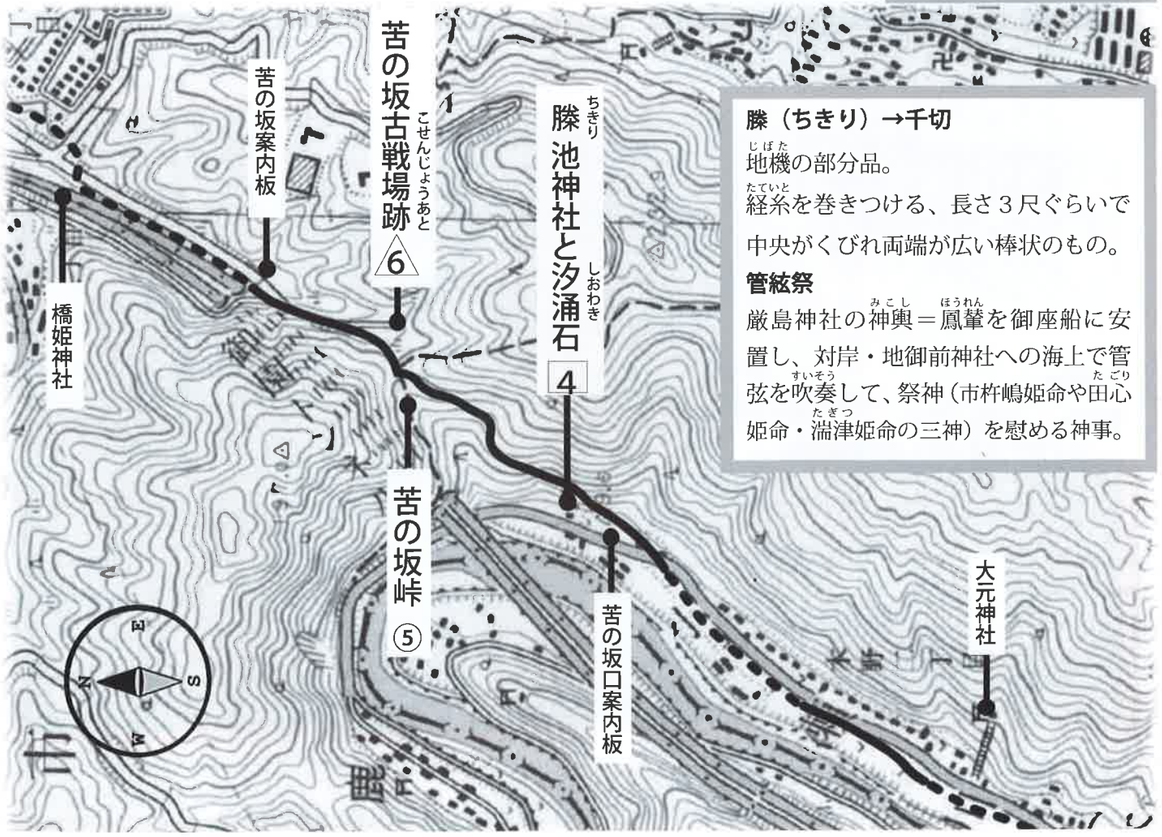
苦の坂は、西国街道の広島以西における五大難路の一つです。苦の坂頂上から御園側に約700m下ると、小さな祠、橋姫神社があります。由来など不明ですが、現地の説明文に「以前は西国街道一の坪川、馬ころ橋の下に鎮座していた」とあります。馬ころ橋は、江戸時代には長さ幅とも2間（3.6m）の土橋と記録があります。一般的に急な坂道のたとえとして「馬ころばし、馬だめし、馬返し」と形容することがあります。

江戸時代、苦の坂道に「馬ころばしの松並木」がありました。元禄5（1692）年5月、松平丹後守の家来が、馬で苦の坂を通っていたときに馬が転び、落馬した事故がありました。このため、松を植えたので「馬ころばしの松」との記録があり、馬ころばしの「転ばし」が変化して「馬ころ橋」になったと思われます。

橋姫神社は、橋を守る交通安全の守護として、橋姫神を祀ったと推測されます。

4 滕池神社と汐涌石

厳島神社の祭神である市杵嶋姫命が滕（機織りの縦糸を巻く鉄の棒）を沈めた池を埋めて祠を建て、姫と滕が祀られている。社殿の下には汐涌石という奇石があって、厳島神社の管絃祭（旧暦6月17日）の夜には石の穴から海水が湧き出ると伝えられている。地元では、汐涌石を「しおふきいわ」とも呼ぶ。



昭和60年の山陽自動車道建設に伴い、現在地に遷座し、交通安全の守護神として山陽自動車道を見守っています。昼なお薄暗く、キツネやタヌキが人を化かすと信じていた昔、女性や子どもは通るのが恐くて「嫌だ、嫌だ」と言ったことなどから、江戸時代は小方村の地名でこの谷を「いやが迫」（迫は谷と同義語）と名付けていました。

今は、健康づくりの道・歴史の散歩道になっています。一千年以上の歴史をもつ苦の坂を歩いてみましょう。

6 苦の坂古戦場跡（長州の役）

慶応２（１８６６）年６月１４日未明、幕府側越後高田軍（新潟県）総勢１，０００人の兵が苦の坂や御園の谷に群がる。これに対し、中津原（木野一丁目）を本陣とする長州軍約２００人の兵は、立戸、油見の尾根伝いに苦の坂に進む隊と、北の防鹿の山道を登る隊、そして正面突破の最強遊撃本隊などが、夜明けと共に一斉に三方から頂上に攻め登り銃撃戦を展開した。攻めかかる長州軍に耐えきれず、高田軍は総崩れとなり、小方に追い落とされた。

この苦の坂頂上は、開発の手が入っていないので、往時の状況が浮かんでくるようだ。

⑤苦の坂峠

市杵嶋姫命が「えらや苦しやこの坂は金の滕もいらぬもの」と詠まれたという。その後、誰いうとなく小野の坂を苦の坂と呼ぶようになったといわれている。頂上からの道分かれは、防鹿・立戸・油見に通じていた。

木野村・苦の坂周辺（「行程記」部分）

木野（小野）村から、苦の坂を登る際の、苦の坂の険しい様子が描かれている。